

ミチコ・タナカ
男たちへの讃歌

角田房子

新潮社





新潮社

ミチコ・タナカ
男たちへの讃歌

角田房子

ミチコ・タナカ 男たちへの讃歌 おとこさんか

一九八二年三月一五日 発行
一九八二年五月一五日 二刷

著 者 角田 房子 つのだ ふさこ

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 (業務部) 03—二六六—五一—
(編集部) 03—二六六—五四—

振替東京四—八〇八

印刷 株式会社 金羊社

製本 新宿加藤製本株式会社

定価 一二〇〇円



© Fusako Tsunoda
1982, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ミチコ・タナカ 男たちへの讃歌 * 目次

伝説の女ミチコと私 7

*

ウィーン、ワルツに酔う美少女 17

大富豪との結婚 31

初舞台「蝶々夫人」 47

“灼熱の恋” 63

ヒトラーの使者 77

パリからベルリンへ 96

第二の結婚 111

空襲下の口紅 127

ベルリン陥落 141

金の鹿ホテルの思い出 156

文化大使ミチコ 171

引退公演は日本で 195

夫の死 215

粉雪舞うミュンヘン 230

*

黄金色の森 245

装幀 櫻井昭治

ミチコ・タナカ 男たちへの讃歌

伝説の女ミチコと私

カーテン・コールの中を舞台に迎えられたカール・ベームは、今まで「エレクトラ」幕切れの激情をひき出していた指揮者とは思えない老いの姿だった。リヒアルト・シュトラウスのオペラにかけては現代の最高峰とされる指揮者への拍手歓声は、いつまでも消えようとする。隠せない疲れに体をこごめながらも、いかにもウィーンの芸術家らしく丁寧に聴衆にこたえる彼が終始左手を握ったままなのが、それに気づいた人には奇異に感じられた。一九七九年春、ハンブルク国立歌劇場である。

客席最前列の漆黒の髪的女性が、つと立ち上って、もの馴れた派手な動作で舞台へキスを投げた。濃い化粧も、緑色のロング・ドレスの着こなしも、この情景にふさわしく一分のスキもないドイツ風だが、容貌は明らかに東洋人であった。舞台のカール・ベームはこの女性の投げキスを、敬意と親しみをこめた微笑で受けとめ、腰をこごめ、騎士の作法のように右手をさしのべて会釈した。

「あっ、ミチコ・タナカ！」

「フラウ・デ・コーヴァだ！」

などという周囲のざわめきを愛想よく受け流して、緑の服の女性は人ごみを縫って楽屋口へ向かった。在留邦人が旅行者か、十人ほどの日本人がそのあとを追う。カール・ベームと親しいら

しいこの女性についてゆけば、日本にも何度か来た高名な指揮者のサインをもらえるだろうと……。

彼女の席の近くにいた四、五人連れのドイツ人は、混雑が納まってから出ようというつもりらしく、腰かけたまま雑談を交していた。

「相変らず美しいなあ、フラウ・デ・コーヴァは。このあいだテレビで見たが、実物の方がきれいだ」と、白髪の紳士がいった。

「ヴィクトル・デ・コーヴァの未亡人ですね」青年の声であった。「デ・コーヴァはすごい人気俳優だったんですね、特に女性の間で……。うちの母なんか、今でも彼の死を惜しんでいますよ。ただどの未亡人はすごいなあ。カール・ベームほどの大マイスターが、舞台から彼女一人に向かっておじぎをするなんて」

「いや、珍しいことじゃないよ」と、中年の男が答えた。「私はよく音楽会に行くから、彼女が今夜のように敬意を表されているのを前にも見たことがある。シュヴァルツコップはベルリンで引退公演をしたとき、舞台から手を延して客席のミチコ・デ・コーヴァと握手をした。もうピアノを閉じたときでみんな驚いていたが、実はこの二人は揃ってコロラチュエラ・ソプラノのマリア・イヴォーギュンの折紙つきの弟子だったんだよ」

この音楽通が「珍しいことじゃない」といった言葉は裏づけることができる。田中路子は生まれおちて以来の贅沢な境遇と習慣で、いつも誰かにつき添われている。一人では何もしないし、できもしない。未亡人になってからも外出などには必ず弟子か、路子と親しい誰かがついている。その一人、ピアノ室井摩耶子は語る。

「私はカラヤンやフィッシャー・デイスコウなどが、舞台からミチに向かってあいさつするのを

何度も見えています。デ・コーヴァの未亡人だから丁重に扱われるということではなく、ミチ自身の力ですよ。彼女の顔の広さと実力とは、日本では想像できないほどすごいものです」

今もミュンヘンで路子の指導を受けている歌手宇治操は語る。「引退公演のシュヴァルツコップが舞台の上と下で田中先生と握手なさったのを、私はそばで見えていました。そのほか、クリスタ・ルードヴィッヒもペーター・シュライヤーも、ヴァイオリンのツッカーマンも……」

ハンブルクの歌劇場で、白髪の紳士はようやく歩いてきた通路からロビーへ歩きながら、まだフラウ・デ・コーヴァの話が続けている。

「そう、それに彼女は映画にも出ていたな。もう昔のことだ。それにしても彼女、いつまでも華やかな存在だなあ。新聞がミチコ・タナカの最初の結婚を書きたててウィーン中の話題をさらったのは、私がまだギムナジウムの生徒（中学生）のころだった……」

「まさか！」青年が大声でさえぎった。「おじさんのギムナジウム時代といえば、五十年前も前じやありませんか。あの若々しいきれいな人が、五十年前も前に結婚したなんて！」

「本当だよ」白髪の人は青年をふり返っていった。「信じ難いことだが、本当だよ。音楽学校の学生だった日本の少女ミチコが、オーストリアの大富豪ユリウス・マインル氏と結婚したのは、五十年ぐらい前のことなのだよ」

田中路子は七十二歳（一九八一年・昭和五十六年）、一九〇九年（明治四十二年）七月十五日生まれである。彼女は「あたしはもうご隠居さんよ」とスラッというが、その声はハリハリとしている。彼女はほんとうに若い。年寄りが若がるいやらしさは全く感じられず、自然である。いまは、一九七九年（昭和五十四年）にベルリンを引き払って以来、ミュンヘンに住んでいる。

一九八〇年（昭和五十五年）十二月、私はミュンヘンに滞在していた。そのとき路子は私に、ハン

ブルクで「エレクトラ」を指揮した夜のカール・ベームを語った。ベームの死の八ヶ月前である。「演奏がすんですぐカールの楽屋へとんでいって、『成功おめでとう』のキッスをしたとき……」ベームはまだ左手の指を堅く握りしめたままであった。路子が、舞台でも気づいていた握りこぶしのわけを訊ねると、ベームは時計を見て、「ああ、もう済んだ」と初めて指を開き、照れたような微笑で路子にいった。

「実は、今夜は息子の初日なんです。ベルリンで……」

その言葉で路子に事情がわかった。ドイツには願ひごとをするとき、親指を押えて握りこぶしをつくる俗習がある。しっかりやれと人を励ます時も「親指を押えているよ」などという。

老ベームの長男カール・ハインツ・ベームは舞台俳優である。初日の成功を心から願う父ベームだが、ちょうどその日その時間、ハンブルクで指揮をする彼は西ベルリンの劇場に駆けつけることができない。そこで彼は、息子が舞台に立っている間、右手で指揮棒を振りながらも左手を祈りの形に握りしめて、息子の成功を神に願っていたのだ。

「息子ベームはピアノもうまいし、とても才能のある人よ」と、路子は長いつけまつ毛が影を落とす頬に微笑を浮かべて、私にいった。

「ハインツは三度離婚したんだけど、その度にパパが大金を出して上げたの。ベームって本当はけちゃんぽなのよ。でも、息子をとっても可愛がっているのね。」

親子でも、夫婦でも、恋人や友だちでも、純粹な愛情で結ばれている人間関係って、本当に尊いと思うわ。いい人間関係をたくさん持つことのできた人生こそ、最高といえるんじゃないかしら……。その点、あたしは自分を『しあわせな女』だと思っているわ」

私が初めて田中路子の美貌を知ったのは、記憶もおぼろになるほどの昔、東京で彼女主演のオ

「ストーリー映画『恋は終りぬ』を見た時である。いま年代を繰ってみると、一九三六年（昭和十一年）の早春、二一・二六事件の前後であった。

その後、第二次世界大戦前のパリで暮すことになった私は、路子の華やかな男性遍歴の噂をたびたび耳にした。路子主演のフランス映画『ヨシワラ』が、日本で国辱映画と騒がれたところである。『ヨシワラ』で共演した早川雪洲も路子の恋人の一人で、そのほか「十指に余る男たちが……」という噂を聞いて、学生だった私は目を丸くしたものだ。パリに日本のひま人が多いことは今も昔も変わりなく、面白いだけが目的の真偽不明の無責任な話題が横行していた。

一九三九年（昭和十四年）、第二次世界大戦勃発後間もなく日本に帰った私は、その後の戦中戦後の混乱した生活の中で、田中路子の名前を思い出すこともなかった。

一九五六年（昭和三十一年）から、私は新聞社の特派員の妻として再びパリで暮すことになった。そして、久しく忘れていた田中路子の噂をときどき聞くようになった。だがそれは「日独親善に尽す民間大使」「日本の音楽学生世話の徹底的にする親切な女性」「名優ヴィクトル・デ・コーヴァの妻として、あっぱれな内助の功」というような賞讃ばかりであった。

かつて戦前のパリ在留邦人の間で、のぞき見趣味と岡焼きから「日本人ではたぐい稀れな淫奔女」のように語られた田中路子と、戦後の「立派な女性」ミチコ・デ・コーヴァとは、どこで、どのようにつながっているのだろうか——。私は大いに興味をそそられた。だが、やがて本人に会う機会が来ようとは、まして親しい友だちになるなどとは、思ってもみなかった。

一九六〇年（昭和三十五年）、パリでも、書き一年生になったばかりの私の許に、「文藝春秋」から「ベルリンの田中路子を書いてみないか」という手紙が来た。私は大乗気で承諾した。

先ず予備知識を得たいと思った私は、駐仏大使古垣鉄郎をアヴニール・オッシュの公邸（当時）にたずねた。私は友人の一人から「古垣大使は若い日の田中路子をご存じのはず」と聞いていた。「私がウィーンで田中路子さんに会ったのは、彼女がマイルド氏と結婚した直後のことでした」

と古垣は語った。そのころの古垣は朝日新聞の特派員であった。「私は非常に強い印象を受けました。憂愁の美少女でしたよ」

その日、古垣が招待された席に、路子の夫ユリウス・マイネルは十五分ほど遅れて来たという。それは、日本人同士くつろいで話せるようにとの配慮であった。

「その十五分間で、私はすっかり動揺したことを覚えています。ウィーンという街を、このまま離れたい気持ちにまでなりましたよ」

なかば冗談ながら、実感のこもった言葉であった。最後に古垣は路子について、「瘦せすぎな、清楚な体つきで、静かな微笑を浮かべているこの少女は、本当に男心を震わせる魅力がありました」と語った。

大使公邸からの帰途、私は古垣の「清楚な体つき」という言葉を何度も思いかえした。田中路子を、肉体的にも西欧の女なみのたくましさを持つ人と想像していた私には、意外な言葉であった。

「デ・コーヴァ夫人として現在の安定した生活に行きつくまでに、十人は恋人を替えた」などという「路子伝説」も、美貌と才氣と強健な肉体に恵まれた西欧の女なら、さして珍しいことではない。だが明治末期に生まれた日本の女としては、精神的にも肉体的にもよほど特異な生まれつきと想像していた。

しかし古垣がウィーンで会った結婚直後の路子には、日本の少女の脆弱さがあったという。その彼女が、どうしてあの烈しい生活を持つようになったのだろうか――。私は期待に心はずませて、ベルリンへ向かった。

このとき私には楽しい同行者があった。前年ブザンソンの国際指揮者コンクールに一位で入賞した二十五歳の小澤征爾で、彼は私の取材申し込みを路子にとりついた「橋渡し役」であった。当時の小澤はヘルベルト・フォン・カラヤンの弟子になるためのコンテストに合格して、毎月レ

ッスンを受けるためパリからベルリンに通^{かよ}っていた。私を乗せた小澤の車は、深い霧のため交通標識はおろか、路面に引かれた黄線さえ見えないアウトバーンをベルリンへ走った。

沿道のレストランで食事しながら、小澤は「日本で僕は桐朋学園の斎藤秀雄先生（桐朋学園大学音楽学部指揮科、弦楽科主任教授、昭和四十九年死去）について指揮の勉強をしたんですが、基礎的な訓練では実にすばらしい先生だったと、ヨーロッパに来てから改めて感謝しています。田中路子さんへの紹介状を下さったのも斎藤先生です」と語った。

「学生時代、かわいがられましたが、すごく怖い先生でねえ、『出て行けっ！』ってどなられると、みんな我先にとび出すんだが、玄関で靴をはいてるひまがないから、はだしで駆け出しちゃう。あとから奥さんが僕たちの靴を持って追いかけてきて下さったり……」

私は笑いながら聞いていたが、斎藤のような師の熱心な指導があればこそ、小澤たち若い音楽家が育つのだ——と、彼の熱意を尊いものにした。やがて私はベルリンで路子を取材し、彼女のいう「あたしの初めての男」がその斎藤秀雄であることを知って、あっと驚くことになる。

私がベルリン郊外のデ・コーヴァ邸で初めて会った路子は五十歳に達していたが、美男俳優として鳴らした夫と並んでも、少しも見劣りしない美貌と貫禄を具えていた。このとき、身長は一メートル五十八センチときいたが、その数字より彼女はずっと大きく見える。かつての「憂愁の美少女」が発散させた雰囲気は、ブルゴーニュの赤ぶどう酒の雄々しい芳醇を感じさせた。いかにも歌手らしく、張りのある若々しい声が印象的だった。

「取材なので、ぶしつけな質問もいたしますが」という私に、「今さら、自分の過去をかくそうなどというケチな気はありません。だからこそ、あなたのお申出を承諾したのです。何でもお聞きなさい。洗いざらい本当のことをお話ししますから」と、打てば響くような答が返ってきた。

彼女は初めからうちとけた態度で、二度の結婚についても、その間に点在する恋人たちのこと

も、驚くほどの率直さで話してくれた。こちらが戸惑う程ぐいと手許に引きよせての親しさには何の構えも気取りもなく、私が書きやすいように出来るだけ協力しようというムキなまでの親切が感じられた。

数日にわたるデ・コーヴァ家滞在の間に、私たちは「ミチ」「フサコ」と子供のときからの友だちのように呼び合う親しさになった。私は路子のぎつくばらんで温かい人柄にひかれ、自分を偽ることなく生きぬいた彼女の強靱な精神にひきつけられた。

その翌年、一九六一年（昭和三十六年）は、八月に東西ベルリンの境界線に「壁」が築かれて、世界を震撼させた年である。私は「壁」の取材のため、またパリからベルリンへ行った。いったんホテルに落着いてから、路子に連絡すると、「あら、なぜあたしの家に来ないの？ いやな人、遠慮なんかして。すぐお迎えに行くわ」と、返事をするひまも与えず彼女は電話を切った。こうして私はまた路子の家に泊った。

この仕事のあと間もなく私は五年余り住んだパリの家をたたんで帰国したが、その後もヨーロッパへ行くと、ドイツに用事がなくても路子に会いにベルリンまで足をのぼすこともあった。

路子の方もたまに日本に来ると、ぎっしり詰まったスケジュールの隙を縫って私の家に来てくれる。何年会わなくても、顔を合わせればいきなり昨日の続きのような言葉のやりとりが始まる仲は、すでに二十年を越した。

私がヴィクトル・デ・コーヴァの死を新聞で知ったのは一九七三年（昭和四十八年）四月であった。私はすぐベルリンへ手紙を出したが、路子から「なんとか生きる力をとり戻した」という返事が来たのは、かなり後であった。三十余年の充実した結婚生活の後に夫を失った路子の痛手 pensando、私は今こそ彼女の強靱な精神が役立ってくれるようにと祈った。

一九八〇年（昭和五十五年）十一月末、路子はテレビの仕事などで久しぶりに日本に来た。相変